

見市雅俊著

『ロンドンⅡ炎が生んだ世界都市』

— 大火・ペスト・反カトリック —

中川 順子

一六六六年九月二日。ロンドンには史上空前の大火にみまわれる。約一週間にもわたり、シティの西側半分を焼き尽くす大惨事となったこの大火は、当時の人びとにとって、忘れがたい経験であったはずであるが、歴史家の関心は必ずしも高くなかった。T・F・レッダウェイやW・G・ベルなどの古典的研究をはじめ、建築史や都市計画史の観点から行なわれた若干の研究があるのみである。大火後のロンドンでは都市計画が頓挫し、都市構造が大きくは変化しなかった。そのことが、否定的な評価、ひいては研究の少なさにつながっているように思われる。また大火といっても、後世からみれば、とりわけわれわれ日本人の経験からいえば、それが見たい規模ではなかったことが、日本で研究らしい研究が行なわれてこなかった原因であるかもしれない。

本書は、後世からの視点ではなく、当時の人びとがどのように大火を感じ、受け取ったのかという視点から、ロンドン大火を見直したものである。結論からいえば、著者はロンドン大火に近代

ロンドンの誕生をみだし、そこから新しい近代イギリス史像を描こうとするのである。また、ロンドン大火とそれをめぐる三つの「伝説」を手がかりに、エネルギー革命（とロンドンの煙害問題）、ペスト対策、宗教対立（反カトリシズム）と内戦、すなわち著者が言うところの当時の人びとが体験した「火」で結ばれるこれら三つのことがらを取り上げ、一七世紀という時代を読みとこうと試みているのである。これら三つの出来事の背後に展開するのは、「大陸」を模倣しようとする王権と「島国」であろうとする議会やロンドン・シティ（国民）の二項対立の図式である、と著者は考えている。後者すなわち議会やシティは、いわば自らの伝統や立場を追及し、それらを保持しようとしたのである。この時期に「アングロ・サクソン」意識（国民意識）が形成されつつあったことや、その決定的な要因として反カトリシズムがあったことも、本書では主張される。著者の言葉によれば、イギリスは近代のバイオニアであり、その近代とは意図されずして到来した早熟なものであった。

まず本書の構成と内容を簡単に紹介しておく。本書は、

プロローグ

第一章 ロンドン炎上

第二章 シティ再建——商都か帝都か

第三章 ペストの終焉——「隔離」対「かがり火」

第四章 反カトリシズムの炎——宗教対立の時代

エピローグ

補論 ペストとネズミ

の七つの部分から構成されている。

問題意識と内容紹介を記したプロローグに続き、第一章では、一六世紀後半から大火前夜までのロンドンの変化について、同時代人ストウの著作などから概観する。ついで、ロンドン大火の経緯と被災状況が、時間を追って、日本の明暦の大火と比較されながら、詳細に叙述される。日本の場合と比べれば、ロンドン大火が大火とよぶに値しないものであっても、当時にあつてはそれが大事件であつたことにはかわりなく、その機会を利用して理想的な都市を造ろうという近代的な都市計画の発想が生まれた、と著者は次章につなげる。

第二章では、ジョン・イーヴリンの都市観や計画を手がかりに、大火後の再建の経過が語られる。ここで問われるのは、第一の「伝説」、すなわち、大火後りっぱな都市計画があつたにもかかわらず、それが実現しなかつたという「伝説」である。王権側は大火を都市改造の絶好の機会と捉え、大陸を模した豪華な、帝国にふさわしい帝都建設を夢みる。しかし、自らの特権的地位を保持するために、一刻も早い経済活動の復興を希求していたシティが描いていたのは、壮麗な都市ではなく、商都としてのロンドンの復活であつた。

著者によれば、再建をめぐる、「革新」（国際的）の王権と「伝説」（民族主義的）の議会派・シティが対立し、結局のところ、議会の主張するアングロ・サクソンの国民文化が勝利する。ロンドンには基本構造を変えずに、煉瓦・石造りという防災都市の実利を得ながら商都として復興する。大火後、ロndonは近代都市となるが、それは早熟な近代化ゆえに「人間的」な都市空間が

かなりの程度まで保持された都市であり、イギリスの文化を体现する場であつた。さらに、ライフ・スタイルについて、再建後のロンドンには個人が快適に暮らすという現代に通じる価値観がみいだせる、と著者は述べる。

ロンドン大火の前年には、ペストが大流行している。第三章では、ペスト流行時の様子と、ロンドンの再建によりペストが消滅し、「市民社会」が伝染病に勝利したという「伝説」が定着した経緯を、同時代人たちの著作からみる。著者は、ペスト対策においても、隔離政策を主張する王権と、伝統的な「かがり火」をたく行動によってペストを追ひ払おうとする市民とのあいだにズレがみられたとする。さらに、ペストを克服したことによって、イギリス人はペストに苦しむ改革されていない（と彼らが考える）人びとや地域に対して、差別意識、優越感をもつようになった。ペストの終焉によって、イギリス人の死生観に変化が生じ、現世を楽しむ新しい生活文化が誕生した、と著者は論を展開する。

第四章では、大火はカトリック教徒による放火が原因であつたという「伝説」を軸に、この当時の宗教対立とその影響下での政治事情が語られる。放火「伝説」の背後にあつたのは、イエズス会を筆頭としたカトリック勢力への反発、恐怖心であり、親フランスの態度をみせる王権と反フランスの態度をとる議会の対立であつた。当時の社会や、また内戦（革命）を理解するためには、宗教的要素を重要視しなければならないと考える著者は、宗教革命以降の社会をカトリシズムの影響とそれに対する脅威をキーワードとして読み直そうとする。内戦への過程と議会派の勝利については、反カトリシズムが役かつていたこと。国民は政治的

カトリシズムを望まなかったが、宗教的カトリシズム（英国国教会）を全面的に否定したわけではなかったこと。ロンドン大火は国民のあいだで反カトリシズム感情を高めたこと。反カトリシズムを最大の契機として、近代イングランドの国民意識は生成されていったことなどの見解がこの章では提示される。

終末論と科学革命の時代というタイトルがつけられたエピソードでは、一七世紀をどのような時代と考えるか、一七世紀にどのような変化が生じたかについて、著者の見解がまとめられている。著者によれば、一七世紀は、科学革命と終末論や魔女狩りが並存する時代であり、議会主義の確立という歴史的な出来事とカトリシズムの恐怖というまことに卑小な現実がともにある時代であった。そのアンバランスさこそ、一七世紀の実相であったと著者は言う。大火以後、エネルギー革命をその原動力として、近代が到来し、それとともに終末論は消え、都市生活は空間・時間的に世俗化されていくのであった。イギリスは他の国より早く都市化・近代化するが、その都市化・近代化は早熟な「革新」であつたために、逆にあるいものを引きずつたままのそれであつた。国民という意識もこの時代の血みどろの抗争をへてようやく定着する。ロンドン大火を契機に、ロンドンに近代が誕生し、ロンドンは「世界都市」への道を歩み出す。その一方で、ロンドンの人びとは「商都」に満足していた。また、現世の社会に価値を見いだすという考えが広まろうとしていた、と論じて著者は本論の筆をおく。

最後にベストとネズミの関係について解説した補論があるが、以上が本書の簡単な内容紹介である。各章で、より詳しい説明が

のぞまれる箇所が散見されるが、紙面の制約上、本稿では本書全体に関わるものがらに焦点をしぼり、コメントを記したい。

まず、同時代人の言説を手がかりに著者が描くロンドンの姿や時代像は、ユニークなものであり、これまで理解されてきたそれらとは異なるところも多い。大火をさかいに生じた人びとの思考の変化や価値観のあり方に関する著者の見解についてもまたしかりである。たとえば、死生観の変化やライフスタイルに関する価値観の変化についても著者は独自の主張を展開するが、それを裏付ける言説、実証はやや脆弱で、読者としてはいささか納得しづらく、とまどいを覚える。

次に、「近代」という用語の使用についてである。本書が主に取り上げる時期は、さまざまな意味で特徴をもつひとつ時代として捉えることが可能と考えられることから、一般に近世ともよばれる時代に含まれる。そこに近代という語を用いたところに、著者の意図や主張を汲み取ることは可能であろう。もちろん、近代とひとことでいえども、捉えかたによってその意味内容に差異が生じるのも当然である。しかし、本書で用いられている近代という用語の指す内容つまり筆者が近代という言葉に込めた主張はややあいまいであり、しかもおそらくその意味が微妙に異なっていると思われる「近代」が頻出するのである。本書において、大火後に、誕生したロンドンとは、一般に近代のロンドン（工業化以降のロンドン）とわれわれが理解するそれと同じなのであるか。もちろん、著者もそのことを踏まえて、近代に「早熟な」という形容詞をつけてはいる。しかしながら、価値観や思考の変化であれ、都市構造の変化であれ、イメージを具体化させ、読者の混乱

を避けるためにも、やはりもう少し説明を加えるべきであろうし、語の使用に際し、より踏み込んだ、また丁寧な定義、説明が必要かと思われる。

また、国際的な王権対島国であろうとする国民（ロンドン）という図式は、やや単純で一面的すぎる見方ではないだろうか。本書で語られるロンドンやそこに存在する人びとの姿、登場するプロバガンダについては、ロンドンを閉鎖された空間として考えるのなら、そうともいえないかもしれない。しかし、本書で描かれる「田園」都市やロndonは近代都市あるいはロndon像の一面面に過ぎないのではないだろうか。経済的な実利と人びとの感覚（あるいは言説）が一致することなく、双方が矛盾を孕みつつ並存することは往々にしてある。当時、イギリスの玄関であった国際貿易港としてのロンドン、そこを拠点に活躍するロndonの商工業者（彼らのなかにはロndon市政にかかわる人びとも少なくない）の存在や彼らの思惑、反発したり対立したりしながらも、受け入れた外国文化、外国人（カトリックも含めて）との交流という、ロndonのもつ国際性、あえて言うならば現実と意識の違いというものを、本書では軽視しているのではないだろうか。この点を含め、当該時期のロndonを、言説とは別に実態的にまた経済的に、捉える部分があれば、ロndonに対する理解はやや違ったものになり、さらに深まったのではないか。

プロテスタンティズム中心の歴史観を批判し、カトリシズム（あるいは反カトリシズム）をキーワードに当時の政治や社会の読み解こうと試みている第四章は、本書のなかでは異色の感があり、著者の理解をめぐっては批判も出るであろう。近年、近世に

おける反カトリック感情やカトリックとプロテスタントの二項対立の図式については——とりわけそれらの実態については——研究が進展している。本書のなかでも、言説と実態の乖離についてふれておくべきではなかったか。国民意識についても、プロバガンダとしての反カトリック感情が、その生成に大きな役割を果たしたことを否定することはできない。しかし、当時の人びとの外国人に対する対応をみる限りにおいては、プロバガンダとしての反カトリック感情だけでは解決されない部分もあり、現実はその単純ではないであろう。このような観点からすれば、本書の域を越えるであろうが、宗教以外の要素も考慮されてしかるべきである。

本書の各章は、それぞれが独立して本となるようなテーマを扱っている。テーマを狭く、深く扱うという最近によくみられる研究のスタイルとは異なり、ひとつの問題について、関連したことがらを結び付けつつ——もちろんそれぞれの関連づけには注意が必要ではあるが——それらを整理して多角的に、横断的に、ときには長期的な歴史の流れのなかで考察しようと試みられている点は、興味深い。また、本書が同時代の著作などから、言説レベルにおいて当時の社会のあり方やその雰囲気的一端を描きだすことに成功したことも確かである。第三章や補論は、伝染病に関する著者のこれまでの研究が生かされたかたちになっている。本書はその主張において「火種」を抱えており、肯定的に受け取るにせよ、批判的に受け取るにせよ、議論の契機となるに相違ない。選書ということで、本書での語り口は平易かつ軽快である。それにもかかわらず、筆者が誤解を犯していれば、ご容赦いただきたい。

〔付記〕 本稿はイギリス都市生活史研究会における本書の合評会（平成
一二年九月一五日）での筆者の報告を文章化したものである。執筆にあ
たり、ご教示をいただいた皆様にはこの場をかりまして御礼申し上げます。

（B6判 二七〇頁 一九九九年六月 講談社選書メチエ 一六〇〇円）

（大阪大学文学部助手